

前山君の業績

藪内清*

前山君が突然に亡くなられた。ほんとに突然である。8月の4日から富山県の新湊で数人が集まって貞享暦書の研究会をやった。その朝に広瀬台長と前山君は、混雑する列車で到着されたが、2人とも大変に元気で午後からはさっそく研究会をはじめた。一応会は7日で終了し私はすぐに京都へ帰ったが、前山君ほか数名は1日残って高樹文庫の調査を行われた。ここは幕末の数学者石黒信由の旧宅であり、遺書が多く残っていた。あとで聞くと文庫の調査で大分疲れた模様であった。10日の日に東京天文台からの電話で前山君が帰途軽井沢で逝去されたことを知り、全く茫然としてしまった。こんどの研究会は私があっせんしたのであり、前山君の死の直接の原因が今度の旅行にあったことを思えば、私の責任も軽くない。しかしそうした責任を考えるよりも、もっとも信頼できる友人を失った悲しみが深く私をおそった。

前山君を知るようになって、すでに10年にはなろう。ごく少ない同じ方面の研究者として絶えず文通していたが、1 昨年の夏から毎年暦法史の研究会をやることになり、第1回は高野山で授時暦、昨年は浜松近くの岩水寺で曆象考成、それに今年は3回目であった。何れも短い日数であったが、前山君の立派な人柄と着実な学風とを十分に知ることができた。来年からはいまい少し集中的な研究をやろうと相談していたが、それも空しい。前山君は東京天文台で曆象年表の計算をやっておられた。いつか百済教猷先生が「大言壮語するものは曆計算には向かない」といっておられたが、前山君はこうした仕事には打ってつけの人であった。無口でしかも着実な仕事をこつこつとつづける学者であった。平常から健康に恵まれていなかったようであるが、生前かなり各地を旅行され、日本暦法史の資料を調査されていた。私も数回、前山君が調査された後に同じ所を訪れたことがある。昨年の秋に長崎図書館に行った時、数日前に前山君が来られたことを知った。重い複写装置を持って、重要な資料を精力的に写しとられた。8月10日の高樹文庫の調査でも、暑い文庫の中で何十本かのフィルムを消費されたようである。歴史研究には何としても根本資料が必要である。現在前山君ほど暦法史の文献の所在を知っていた

学者はなかった。今年の研究会でも文献のことになるかと前山君の独壇場であった。1 昨年の研究会の時にくらべ、前山君の学識が一段と深くなったのに、私はひそかに驚いたほどであった。写し終えた資料は、また克明に目を通しておられ、1つ1つの文献の内容についても私たちは絶えず教えられた。簿記帳のような厚いノートにカッコリした文字で、調査したり思いついたりしたことを書きこんでおられた。このノートは現在では何冊になったことであろう。江戸時代の天文学者渋川景祐のように、実にたんねんに記録をとっておられた。前山君の机上には文献や論文のカードも整然ととのえられていた。何かの形でこれらのノート類が発表されればと念願する。

前山君の仕事はいよいよこれからの段階であったように思う。立派な室はすでに胸中に深く蔵されていたが、惜しいことに発表された論文は少ない。専門とする日本暦法史の関係では別項に掲げたものがある。

発表された限りでは寛政暦や天保暦、それに天文学者として高橋至時やその子の渋川景祐に深い関心を持っておられた。これまで中国の暦法をほとんどそのまま使っていた日本人が、非常な苦心の末に西洋天文学を理解し、それをとり入れて行った過程に深い興味があったらしい。高橋至時の苦心や父の事業を完成させた渋川景祐の人柄は、そのまま前山君のものであったように思われる。東京天文台には平山清次先生、小川清彦氏など日本暦法史のすぐれた研究者がおられたし、その方面の蔵書にも貴重なものが多い。前山君の以上の論文は、東京天文台の蔵書を中心に行われたものであるが、深い知識の一端を示されたに過ぎなかった。前山君の研究はもちろん江戸後期の暦法だけではなく、ことに最近では東京大学史料編纂所の桃教授とともに、宣明暦の研究とそれが行われていた時代の暦書の調査を熱心にやられていた。この方面の成果が全く世に出ていないことは、何としても残念なことである。

与えられた紙数が尽きた。東京天文台には日本暦法史研究について長い伝統がある。どうかこれをつづけて前山君の後継者が育つことを期待している。(1963. 9. 5)

前山仁郎君を偲ぶ

佐藤友三**

* 京大人文科学研究所

** 東京天文台

私が天文台へ転勤して来たのは戦争も末期に近い昭和19年4月上旬で、その頃前山君は福見先生の下で数十